

「朴」字の意義

寺井 泰明

キーワード：朴、厚朴、榎、ホオノキ、エノキ、日中比較語誌

はじめに

現在の日本では「朴」字は一般に樹木のホオノキを表す。手許の辞書を見ると、『漢語林』¹は「①木の皮。②すなお。かざりけがない。(中略)③大きい。」のあと、「④ほお」を太字で記す。「おもな訓は太字で」というのが、この辞書の表記法である。ただ、『漢字源』²は「朴」の意味として最初に「えのき」を掲げていて、「ほお」は「日本語特有の意味」、所謂国訓の扱いである。そこで、国語辞典で「えのき」を見ると、『広辞苑』³が「えのき」の項に「榎・朴」と、両方の漢字を掲げている。しかし、小型の辞書になると、例えば『新明解国語辞典』⁴が「えのき」に当てている漢字は「榎」のみであり、前掲『広辞苑』でも「えのきだけ」に当てる漢字は「榎茸」のみになる。つまり、現代の日本における「朴」字は「ほお」としての用法が一般であり、「えのき」はどちらかといえば漢語の用法によるものと想像される。因みに、中国語の辞典を調べてみると、『中日大辞典』⁵は「朴 po4」⁶および「朴樹 po4 shu4」を「エノキ近縁種」とし、『中日辞典』⁷は「朴 po4」を「エノキ、ヨノキ」とするのみである。

「朴」の現代における一般的な意味は、日本ではホオノキであるのに対し、中国では専らエノキである。「榎」字については既に論述したことがあるので⁸、本稿では「朴」字に限って、その意味するところの日中間における相異とその由縁を追究してみたい。

I. 厚朴

「朴」字の調査を始めると、日本、中国を問わず、「厚朴」という熟語での使用例が多いことに、まず気づかされる。

1. 古辞書の「厚朴」

日本の代表的古辞書『倭名類聚抄』⁹には、

厚朴重皮附 本草云、厚朴、一名厚皮、楊氏漢語抄云、厚木、保々加之波乃岐、釋藥性云、重皮、
和名保々乃可波、厚朴皮名也、

とある。漢語「厚朴」（別名厚皮）の和名を「保々加之波乃岐（ほほかしはのき）」とし、その皮「保々乃可波（ほほのかは）」を「重皮」とする記述である。この「ほほ」は「ほほかしは」の略称と思われる。

『倭名類聚抄』に先立つ本邦最古の辞書『新撰字鏡』¹⁰においても、同様に

厚朴 九月採皮陰干 保々加志波

とある。「採皮陰干」は皮を薬用とするからで、『倭名類聚抄』でも「本草」「釋藥性」など本草書の名が見えるように、「厚朴」は中国渡来の医薬学において重要な本草（医薬品）として、まず認識されたことが分かる。しかし一方、これらの「ほほかしは」あるいは「ほほ」は、『万葉集』などにも歌われていて、その実体を知る手掛かりとなる。

吾が背子せこが捧げて持てる「保宝我之婆」あたかも似るか 青き蓋きぬがさ [19/4204]
すめろきの 遠御代御代は い敷き折り 酒飲みきといふそ この「保宝我之波」

[19/4205]

「きぬがさ」に似ていたり、折って酒器とすることができる大きな葉を持つ「ほほかしは」は今のホオノキに間違いはない。これら古代の「ほほかしは」が、現在の標準和名で言えばモクレン科の落葉喬木ホオノキに該当することについては、ほぼ異論の存在しないところである。

しかし、「ほほかしは」がホオノキであるとしても、それが、日本の古辞書が言うように漢語「厚朴」と同一であるかについては議論がある。古辞書が「厚朴」を「ほほかしは」とみなしたのは、おそらくは中国の本草書などを踏まえての判断と思われるが、風土の異なる中国で生長する植物を、いちいち日本で生長する植物のどれかに同定するには、細心の注意が必要である。ただ、漢語で言う「厚朴」と「ほほかしは（ホオノキ）」の関係については、先人たちが多くの研究を重ねてきているので、ここではその出発点と定説化した成果を確認しておくこととする。

2. 本草学の「厚朴」

まず、伝統的本草学を代表する3つの文献から当該部を引用する。最初に、中国最古の本草書『神農本草経』¹²には次の記載がある。

厚朴 味苦温 生山谷〔原無此語今據御覽増正〕 治中風傷寒頭痛〔此三字御覽無〕 寒熱驚氣〔驚下原有悸字。今據新修刪正〕 血痺死肌 去三蟲〔御覽三字無〕 [卷中]

次に、古代日本への影響が大きかった『新修本草』¹³は上記『神農本草経』と若干の異同を含みつつも、本稿の趣旨からみて大きな相異はない。ただ、異名、産地、採集について以下の記述が加わる。

一名厚皮、一名赤朴。其樹名榛、其子名逐楊。（中略）生交趾、宛胸。三月、九月、十月采皮、陰干。

この資料のこの他の記述は効能に関するもので、ここでは割愛する。最後に本草書の集大成、李時珍『本草綱目』¹⁴から必要部分を抜粋する。

〈厚朴〉

【釈名】烈木、赤朴、厚皮、重皮。樹名榛、子名逐折。

〔時珍曰〕其木質朴而皮厚、味辛烈而色紫、故有厚朴、烈、赤諸名。

〔頌曰〕広雅謂之重皮、方書或作厚皮也。

【集解】

〔別録曰〕厚朴生交趾、冤句。三月、九月、十月采皮、陰干。

〔弘景曰〕今出建平、宜都。極厚、肉紫色為好。殼薄而白物不佳。俗方多用、道家不須也。

〔頌曰〕今洛陽、陝西、江淮、湖南、蜀川山谷中往往有之。而以梓州、龍州者為上。木高三四丈、徑一二尺。春生葉、如榲葉、四季不凋。紅花而青實。皮極鱗皺而厚、紫色多潤者佳、薄而白者不堪。

〔宗奭曰〕今伊陽峽及商州亦有、但薄而色淡、不如梓州者厚而紫色有油。

〔時珍曰〕朴樹肤白肉紫、葉如□□。五六月開細花、結實如冬青子、生青熟赤、有核。七八月採之、味甘美。

皮〔修治〕〔斲曰〕凡使要紫色味辛者為好、刮去粗皮。入丸散、每一斤用酥四兩炙熟用。若入湯飲、用自然姜汁八兩炙盡為度。・・・

では、この厚朴は現代植物学の分類では何という樹種名にあたるのか。『本草綱目通釈』の〔現代研究〕は次のように断定している。

厚朴為木蘭科植物厚朴 *Magnolia officinalis* Rehd. et. Wils. 或凹葉厚朴 *Magnolia officinalis* Rehd. et. Wils. var. *biloba* Rehd. et. Wils. 的乾燥乾皮、根皮及枝皮。この同定は、近年の研究でも変わっていない。例えば『道地薬地方標準薬原色図譜』¹⁶は、〈厚朴〉来源 木蘭科植物厚朴 *Magnolia officinalis* Rehd. et. Wils. 或凹葉厚朴 *Magnolia officinalis* Rehd. et. Wils. var. *biloba* Rehd. et. Wils. 的干燥樹皮。としていて、「厚朴」が *Magnolia officinalis* Rehd. et. Wils. (和名：モクレン科カラホオ)、あるいはその変種であることに差異はない。これらは、悠久の時間を超えて伝承、実践されてきた本草学の成果を受けて、薬品の実物を現代の科学が分析しての認定であり、疑問の余地はない。ただ、『本草綱目』〔集解〕では蘇頌の説ながら、下線部のごとく、葉を「春生葉」として落葉樹を思わせつつも「四季不凋」と記す矛盾があり信頼できない。また、花を「細花」とする点と、果実の形状や味については「木蘭科植物厚朴 *Magnolia officinalis* Rehd. et. Wils.」の実情に合致せず疑問が残る。この点については後述する。

ところで、『倭名類聚抄』や『新撰字鏡』のいう「厚朴」は「ほほがしは（現代和名：ホオノキ）」である。一方、中国の本草書がいう「厚朴」は上述の如くカラホオであり、ホオノキではない。後にも述べるが、カラホオは日本には自生しない。しかも『新撰字鏡』には、「ほほがしは（ホオノキ）」の樹皮を秋に採集し陰干して、薬用とすることが記さ

れている。他にも、正倉院文書や『榮花物語』の記述など、このホオノキの皮が薬品として広く使用されたことを示す資料がある。

侍従大納言の朔日よりあやしう例ならぬ、^{かぜ}風にやとて^朴ほを参り、湯^{ゆで}茹などして心み給けれど、いと苦しうのみおぼされければ、(中略)うせ給にけれ。

〔『榮花物語』¹⁷三十〕

中国伝統の本草「厚朴」とは異なるホオノキの皮を使用したために、この治療は失敗したということだろうか。

3. 「厚朴」とホオノキ

難波恒雄『和漢薬百科図鑑』¹⁸によれば、「厚朴 MAGNOLIAE CORTEX」は「古来から鎮静、鎮痛的作用があるとし、痙攣性腹痛などの神経的胃腸病、その他の要薬として「半夏厚朴湯」「大承気湯」などの常用処方に配剤されている。」しかし、その〔基源〕は、現代の植物分類法に従えば、一種ではなく、中国産と日本産とは相違する。

中国産の厚朴は、モクレン科カラホオ *Magnolia officinalis* Rehd. et. Wils. の樹皮を乾燥したものであり、商品名を「川朴」、「湖北厚朴」、根皮を乾燥したものは「根朴」という。また、同じくモクレン科カラホオの変種 *M. officinalis* Rehd. et. Wils. var. *biloba* Rehd. et. Wils. も、商品名を「温朴」、「温州厚朴」と称し、「厚朴」の一種とされる。どちらも日本では「唐厚朴」と総称され、成分にほとんど差はない。

一方、日本産の厚朴は、モクレン科ホオノキ *Magnolia obovata* Thunb. の幹・枝の樹皮の乾燥したものである。このホオノキの皮は、日本では一般に「和厚朴」と総称される¹⁹。「唐厚朴」より気味は劣るが、『日本薬局方』ではこれのみを厚朴と規定している。また、韓国産のものでは、ホオノキの樹皮のほか、クスノキ科のタブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. の樹皮をも「厚朴」と称するが「気味は全く異なる」という。

韓国のものについてはさておき、中国の厚朴（カラホオ）は、上原敬二『樹木大図説』²⁰によれば、「中国貴州、四川、湖北の産、農家に植え、樹皮と果とを薬用に供する、野生のものは伐り尽くされて今日は殆ど見ない」のであり、日本国内にも自生しない。日本では自生しないがために、別種ながら近似のホオノキで厚朴の代用としていたことが分かる。上原は「この樹（カラホオ）は一見ホオノキの如し」と述べている。ただ、「代用」の意識があったかどうかは疑問である。現代の植物分類法による厳密な見方からすれば、これは誤解ないし誤同定ということになるが、今日のような分類法が確立する前の時代にあつては、外見も類似し、薬効も大差ないものを、同名の薬の“産地による品質差”として分類したとしても、問題は生じない。『榮花物語』の治療の失敗は、植物の分類や識別・命名法に原因があつたわけではなからうと思われる。

もちろん、薬品である以上、品質差は治療においては重要である。やがて「厚朴＝ホオノキ」とした古代の誤解が修正されていく。貝原益軒『大和本草』²¹は、

厚朴 ホ、ノキ 順和名ニ保々加之波乃木ト訓ス中華ヨリ所来ノ厚朴亦保々ノ木

ノ皮ナリ

と記し、「順和名」（源順『倭名類聚抄』）以来の旧説を遵守しているが、間もなく小野蘭山が『本草啓蒙』²²で次のように主張することとなる。

舶来に数品あり。皮厚く紫褐色にして潤ひ、味苦辛なるを撰ぶべし。是、紫油厚朴なり。皮薄く味苦甘なる者は山厚朴にして下品なり。（中略）

『和名鈔』に厚朴をホホノカハと訓ず。故に今もホウの木の皮を和の厚朴とすれども非なり。舶来にもこの皮を雑ゆ。然れどもホウの皮は味酸して苦辛ならず。（中略）

〔附録〕浮爛羅勒　ホホガシハノキ和名鈔ホウノキ深山に多し（中略）

年久しき者は樹皮厚して舶来の厚朴に似たり。然れども酸味ありて嘔を発し易し。故に用ゆる者炒炙す。商州厚朴にして真に非ず。〔卷三十一〕

小野は「和の厚朴」即ちホオノキの皮を「真に非ず」と斬り捨ててはいるが、その後『重訂本草綱目啓蒙』²³においては、

今葉舖に薩州甌島の厚朴と称するものあり、舶来の厚朴に代用すべし、とも述べている。代用可能なものと劣悪な偽物と、区別も困難なほどに、多くの類似品が混用される現実があったようである。同書はさらに、

近年葉肆にタフ皮と称するものを售る、甚厚く紫色にして、舶来上品の者に似たり、故に奸商唐厚朴に偽る、然れども其味悪く、且つ堅に白き筋あり、意を注て弁別すべし、これグモノキノ天竺桂皮にして厚朴の類にあらず、

と偽物の横行に注意を喚起している。前掲『和漢薬百科図鑑』も、中国近世以降「胸脇部の苦満に用い」られたカラホオの花蕾として「雲南ではクスノキ科の *Manglietia insignis*(Wall.)Blume も用いるが偽品」であるとか、「日本でモクレン科ホオノキの果実を民間的に疝気、淋病、風邪、嘔吐などに」用いるが、「カバノキ科のヤシャブシ *Alnus firma* Sieb. et Zucc. を用いる偽品も」あるといった注意をしている。自然科学の進歩と共に、弁別の精密さが増してもいくわけである。

II. 朴

厚朴については以上で明らかになった。では、「朴」字が熟語をなさず単独で用いられた時はどのような意義を持つのか。現代の日本では、主にホオノキの漢字表記に用いることは冒頭で述べたが、これは本草としての厚朴の一部をホオノキの皮が担っていた以上、強ち誤りとも言いきれない。「朴」は厚朴の略語として通用したということになる。

しかし、冒頭でも述べた如く、現代中国では「朴」はエノキを指す。これはなぜか。

1. 「樸」と「朴」

まず、混乱を避けるために「樸」字に触れておきたい。『説文解字』²⁴には、

樸 木素也。従木業聲。（樸 木の素なり。木に従ひ業の聲。）〔六篇上 木部〕

とある。これについての段玉裁『説文解字注』は、「樸」字の基本義を語り尽くしている。素猶質也。以木為質、未彫飾、如瓦器之坯然。士喪禮、周禮稟人皆云、獻素獻成、注云、形法定為素飾治畢為成是也。引伸為凡物之称。(中略)又引伸為不奢之称。凡云儉樸是也。漢書、以敦朴為天下先、假朴為樸也。(中略)今詩棫樸、周禮樸屬、借用此字。

(素 猶ほ質のごとき也。木を以て質と為す。未だ彫飾せざること、瓦器の坯の如く然り。「士喪禮」・「周禮」稟人皆な云ふ、「素を獻じ、成を獻ず」と。注に、「形 定に法るを素と為し、飾 治め畢るを成と為す」と云ふは是れ也。引伸して凡そ物の称と為す。(中略) 又た引伸して不奢の称と為す。凡そ儉樸と云ふは是れ也。「漢書」に、「敦朴を以て天下の先と為る」。朴を假りて樸と為す也。(中略) 今「詩」棫樸、「周禮」の「樸屬」は、此の字を借用するなり。)

彫飾する前の素木という原義が敷衍して、奢りや虚飾の無い、「質樸」の義となっていくのであるが、現代では「質朴」「素朴」「純朴」のように「朴」字を借りることが多いのは、画数の少ない字形で書写の便宜を図ったものと思われる。この段注が掲げる用例に止まらず、『左伝』や『書経』、あるいは『礼記』などには、「樸」がこの原義どおりに用いられる例が多い。例えば、

桐棺三寸、不設屬辟、素車樸馬、無入于兆 [『左伝』²⁶〈哀公二年〉]

(厚さ三寸の粗末な桐の棺で二重の棺を用いず、飾らぬ車をたてがみも切らぬ馬にひかせて、)

丹漆雕幾之美、素車之乘、尊其樸也。 [『礼記』〈郊特牲〉]

(器物を飾るには、彩色や、彫刻や、縁どりなどがあるのに、祭礼に素車(何の飾りも施さない車)を用いるのは、素樸を尊ぶからである)

といった類である。しかし、こうした古典籍であっても、現存の伝本には、「朴」字で表記されているものも少なくない。

子曰、夏道尊命、・・其民之敝、蠢而愚、喬而野、朴而不文。 [『礼記』〈表記〉]

(夏の政治方針は人民が王命を尊ぶことを最要とした。・・(そのため人民は)やがて弊害として、一般に愚鈍で、驕野で、素朴に過ぎることになった)

なお、段玉裁が「樸」字を「借用するなり」と断じた『詩』の「棫樸」、『周禮』の「樸屬」については、諸説存在するが、本論の主旨から離れるので、言及しないこととする。

一方、「朴」字についての『説文解字』、『説文解字注』の記載は以下のとおりである。

朴 木皮也。従木ト聲。(朴 木の皮也、木に従ふ、トの聲。) [六篇上 木部]

洞簫賦、秋嫺不食、抱朴以長吟。李注、抱音附、引蒼頡篇、朴木皮也。顔注急就篇、上林賦、厚朴曰、朴木皮也。此樹以皮厚得名。按廣雅云、重皮厚朴也。(中略) 按凡鞭朴字、従手作朴、即支字也。凡樹皮字従木作朴。凡棫樸、樸屬字作樸。即樸之省也。凡朴素字作樸。皆見説文。

(「洞簫賦」に、「秋蟬食らはず、朴を抱きて以て長吟す」。李注に、「抱、音附」。「蒼頡篇」を引き、「朴、木皮也」。顔「急就篇」「上林賦」の「厚朴」に注して曰く、「朴、木皮也。此の樹、皮の厚きを以て名を得たり」と。按ずるに、「廣雅」に云ふ、「重皮、厚朴也」と。(中略)按ずるに凡そ「鞭扑」字、手に従ひて「扑」に作る。即ち「支」字也。凡そ樹皮字、木に従ひて「朴」に作る。凡そ「械樸」の「樸屬」字、「樸」に作る。即ち「樸」の省也。凡そ「朴素」字、「樸」に作る。皆「説文」に見ゆ。)

「木の皮」が「朴」の原義であり、その厚いもの、或は厚い皮を持った木の名を「厚朴」と呼ぶという解説である。厚朴の上品が皮の厚いものであることは、先に見た小野蘭山らの説とも符合し、説得力がある。また、後半は「朴」「扑」との相異に言及するものだが、「樸」字についても、その原形を「樸」としている。

そこで、一見すると本論から脇道へ逸れるようであるが、後のためには「樸」についても簡単に触れておきたい。まず、例によって許慎『説文解字』をみる。

樸 樸棗也。從木僕聲。(樸 樸棗也、木に従ふ、僕の聲。)[六篇上 木部]

これに対し段玉裁『説文解字注』は、『爾雅』が棗の名を 11 種も挙げながら「樸」を挙げず、樸、枹者。(樸、枹れる者なり)[釈木]

と説いていることから、「樸＝棗」の許説に懐疑的である。彼はまず「樸」は「枹」「叢」「聚」などの義だとしつつ、「樸」「樸」を古今字とする。そうすれば、当然「樸」も「質樸」の義となる。しかし、一方で、寇宗奭の「御棗甘美輕脆、今人所謂撲落酥者是(御棗、甘美にして輕脆。今人所謂撲落酥なる者は是れなり)」とする説を紹介している。この点は「樸」ないし「樸」に樹木名としての意味が存在する余地を残したものとして注目しておきたい。因みに、馬叙倫は『説文解字六書疏證』²⁷〈卷十一〉で、朱駿聲の「今蘓俗稱御棗為白蒲棗。白蒲即抱樸之轉語(今、蘇の俗、御棗を称して白蒲棗となす。白蒲は即ち抱樸の轉語なり)」とする説を紹介し、自らも、

倫按、字次槭然之間、自當以棗為本義。蘓俗言白蒲棗者、白蒲即樸之合音。亦可證也

(倫按ずるに、字次槭然の間、自ら當に棗を以て本義となすべし。蘇の俗に白蒲棗と言ふ者は、白蒲即ち樸の合音なればなり。亦た證すべき也)

と述べている。「字次槭然之間」とは、『説文』の親字の配列において、「樸」字が「槭」字と「然」字の間に置かれていることを言う。そして、その「槭」には「酸棗也」、「然」には「酸小棗」の説解がある。加えて、蘇の地でいう「白蒲棗」は音韻上「樸棗」というに等しいことなどから、馬叙倫は「樸」の本義を棗とみなしているのである。

しかし、引用文を厳密に読むと、朱駿聲が「抱樸之轉語」としたのは「白蒲棗」ではなく「白蒲」である。馬叙倫自身も「樸」との間に音韻上の関連を見るのは「白蒲」であって「白蒲棗」ではない。そうしてみると「樸」に「棗」義を見出すのは些か無理かも知れない。ただ、蘇地方の俗として、「白蒲棗」を略して「白蒲」と呼ぶようなことは十分あり得ることで、許慎が「樸」即ち「白蒲」を「棗」の一種と誤認していた可能性はある。いずれにせよ、

「樸」や「樸」と「白蒲」との間に音韻上の関連があったことが確認できる。

「朴」や「樸」などの原義に、音韻の観点から迫るものとしては、藤堂明保『漢字語源辞典』²⁸も見ておきたい。同書は「卜・剥・樸」などの諸語を {PUK} 型の発音を有する単語家族と規定し、その基本義を「ポクッと割れる」義としている。「卜」の字形は占いに際して亀甲に生じる割れ目の形を象ったものである。『説文』には「卜とは灼やきて亀の剥われるなる。炙あぶりたる亀の形に象る」とある。同書はこの説解から、許慎が「卜」「剥」を同系と考えていることを指摘し、さらに、「剥」の原形「𠂔」についても、「𠂔とは木を刻んで𠂔𠂔たるなり」とする説解から、「おそらく𠂔とは、ポクッと二つに割る→はぎとる、の意味を含むコトバであろう」と結論づけている。この点については、『廣雅疏證』も同様の意見を記している²⁹。厚朴の「木の皮」の割れ目から道具を挿入して皮を剥ぎ取る作業が彷彿される。

さて、回り道をしてきたが、「朴」「樸」の原義はほぼ明らかになった。以上の資料を、従来の通説に従って解釈している限り、「朴」「樸」に樹木名の意味を見出すことは可能であっても、より明確に「エノキ」の意味を見出すことはできない。一方、中国では古来、「榎」はあくまで「榎」の異体であり、「楸」（キササゲ）の類でしかない³⁰。

2. 日本の「朴」

これまで見てきた「朴」や「樸」などの原義は、基本的に日本へも伝えられた。『新撰字鏡』は、
樸 布久反入朴同字 治也 直也 剗削也 木索也 未治 阿良木³¹
と述べている。「阿良木」は「粗木」で、加工前の木という原義に忠実な翻訳と思われる。ところが、一方で「樸」「朴」の混乱も起こっていた。『倭名類聚抄』は「樸」について、
玉篇云、樸、音璞、字亦作朴、和名古波太、木皮也、
として、「樸」を「木皮」の義と認識している。和名の「古波太」も「木膚」の義と思われる。この点について、狩谷椽齋は『倭名類聚抄』の『箋注』で次のように述べている。

按樸朴二字、其義不同、而質樸字古多借朴、(中略) 未有借樸爲木皮者、此恐源君誤引也、又按廣韻云、樸、木素、又載朴字云、上同、厚朴藥名、是雖二字通、然厚朴之訓、不在樸字下、而在朴字下、亦可以見質樸或可用朴字、木皮不可借樸字也、(按ずるに「樸」「朴」は二字にして其の義同じからず。而して「質樸」の字、古へより多く「朴」を借る。(中略) 未だ「樸」を借りて「木皮」と爲す者有らず。此れ恐らくは源君の誤引なり。又た按ずるに、『廣韻』云はく、「樸は木素なり」と。又た朴字を載せて云はく、「上に同じ。厚朴は藥名なり」と。

是れ二字通ずと雖も然れども「厚朴の訓、樸字の下に在らずして、朴字の下に在り。亦た以て「質樸」或は朴字を用いるべきも、「木皮」は樸字を借るべからざるを見るべき也)「樸」(原義:質樸)に「朴」字を借りて表すことは古来多く行われたところだが、「朴」(原義:木皮)を表すのに「樸」字を借りることは無かったことであり、この『倭名類聚抄』の記

述は誤りだとする説である。多くの用例に接するに、「樸」に「木皮」の義をあてることは確かに少ないように思われる。しかし、源君の誤りは他でも起こりうることであり、そうした誤りが伝本の中に広がっていたことも事実である。

さて、こうした混用を含みつつも、「樸」は「質樸」、「朴」は「木皮」ないし「厚朴（ホオ）」として、基本的に原義に近い形で日本に定着しつつあった。一方、エノキには誤って「榎」字が当てられることが同時に起こっていた。この誤解の経緯については既に別稿で論じたので繰り返さないが³³、ここではその誤解の痕跡として、『新撰字鏡』の次の記載を掲げておく。

榎 古雅反 榎 上字衣乃木

「榎」「榎（榎）」に「衣乃木（エノキ）」の訓が与えられている。

3. エノキの「朴」

ところが、これらの辞書や本草書より古く、日本でも「朴」をエノキに当てることが行われていた。

『日本書紀』には「朴」字の用例が全部で23例あり³⁴、その中には「エ」と読ませる例が14例もある。因みに、残りの9例の内、7例は新羅などの人名で、「ホク」「ボク」と読ませる。また、2例は「朴素」と「淳朴」の1例ずつで、「スナヲ」「スナホ」と読ませている。

「エ」と読ませる14例の大部分は「朴井（エノ井）」「朴井連（エキノムラジ）」「朴市（エチ）」「朴本連（エノモトノムラシ）」など地名や人名を構成するものであるが、その地名人名も、起源においては樹木名に由来する可能性が高い。また、次のように明らかに樹木名であるものも存在する。

於是大連昇衣摺朴枝間臨射如雨。〔卷廿一、崇峻天皇（即位前紀）〕³⁵

（是に、大連、衣摺の^{キヌスリ}朴の^{エノキ}枝間に^{マク}昇りて、臨み射ること雨の如し）

それでは、こうした読み方はどこから来たものであろうか。少し丁寧に中国の辞書や用例を調査してみると、まず、明清代の諸文献に手掛かりになりそうな例が散見される。『正字通』³⁶は樹木としての「朴」に次の解説を付している。

朴 蒲各切 滂入聲 木名 朴樹 膚白肉紫 五六月開細花 結実如冬青子 生青熟赤 有核 七八月採之 味甘美 又本草 厚朴一名烈木 赤朴 廣雅謂之重皮 別録謂子名逐折 樹名榛 陶弘景謂杜仲子亦名逐折 然非

「朴樹」の説明をした後、本草としての「厚朴」を説明しているが、実はこれらの解説は何ら目新しいものではない。前半の朴樹の説明は本稿でも「1. 厚朴」の「2. 本草学の厚朴」で引用した『本草綱目』の、李時珍が展開した説明と完全に一致する。その折の引用に際しては「花を「細花」とする点と、果実の形状や味については「木蘭科植物厚朴 *Magnolia officinalis* Rehd. et. Wils. の実情に合致せず疑問が残る」と記しておいた³⁷。しかし、この『正字通』では、「朴樹」と「厚朴」が対置して述べられていて、「細花」や

果実の形状は必ずしも「厚朴」のものとして捉える必要が無いようにも見える。李時珍は「厚朴」とは別の樹種である「朴樹」の形態を、誤って「厚朴」のものとしてしまったのかも知れない。同じ明代でも、恐らくは『本草綱目』に先行する『三才図会』³⁸は厚朴の項で、「春生葉如柳葉 四季不凋 紅花而青実 皮極鱗皺而厚」など、蘇頌の些か怪しげな解説を引用してはいるが、「開細花 結実如冬青子」などの説明は無い。

勿論、『正字通』が「朴樹」と「厚朴」を別種の樹木とみなしているとするのは早計かも知れない。しかし、この朴樹の説明は、「膚白肉紫」の「肉紫」を別として、「五六月開細花」もその後の実の形状も、「七八月採之 味甘美」に至るまで、実にエノキに似ている。「冬青」は Ilex 属の樹木で、モチノキやウメモドキなどと同じく赤い小果をつけるが、エノキも赤い小果を結び、古来、子供たちのおやつとなってきた。『万葉集』に次の歌がある。因みに、引用底本の表記は「朴」ではなく「榎」である。

我が門の^{えのみ}榎実^み もり食む 百千鳥 千鳥は来れど 君そ来まさぬ [16/3872]

前に「樸」字について説明し、「樸」「樸」の本義を「棗」とする説を紹介した。許慎に始まり、朱駿聲、馬叙倫などの説である。この説は「樸」を蘇の俗言「白蒲」と音韻の上で関連づけたものであったが、これとは別に、「樸」「朴」を「檀」や「駁」あるいは「梓榆」などの樹木に関連付ける説があるので以下に記す。

まず3世紀、陸璣は『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』⁴⁰で次のように述べている。

檀木皮正青滑澤 與繫迷相似 又似駁馬 故里語曰 斫檀不諦得繫迷 繫迷尚可
得駁馬 繫迷一名挈榼 故齊人諺曰 上山斫檀挈榼先殫。駁馬木名 梓榆也 其
樹皮青白駁犖 遙視似駁馬 下章云 山有苞棗隰有樹櫨 皆山隰之木相配 不宜
謂獸

(檀木は皮正青にして滑澤、繫迷と相似たり。又た駁馬に似る故に里語に曰く「檀を斫れば^{あきら}諦かならざるも繫迷を得。繫迷にして尚ほ駁馬を得べし」と。繫迷は一名挈榼、故に齊人の諺に曰く、「山に上りて檀を斫る。挈榼先づ殫く」と。駁馬は木名、梓榆なり。其の樹皮青白にして駁犖^{はくらく}。遙かに視れば駁馬に似る。下章に云ふ「山有苞棗隰有樹櫨」と。皆山隰の木を相配す。宜しく獸と謂ふべからず)

末尾の「下章」は、『詩経』〔秦風、晨風〕に「山有苞棗 隰有六駁 (駁)」とある段の次の一段をいう。「檀」「繫迷 (挈榼)」「駁馬」が相互に似ていること、『詩経』の「六駁 (駁)」はこの「駁馬」という樹木であり、樹皮が「駁犖 (まだら)」であるために、こう呼ばれることをいう。また、この「駁馬」が「梓榆」であるとも述べているが、「樸」や「朴」とは関連付けていない。崔豹『古今注』⁴¹にも、

山中有木 葉似豫章 皮多癩皴 名爲六駁

(山中に木有り。葉は豫章に似て、皮に癩皴多し。名づけて六駁と爲す)

とあり、「六駁」が樹木であることを明示しているが、「樸」「朴」との関連は語られていない。

しかし、「檀」や「駁馬」に似ているとされた「繫迷 (挈榼)」は、実は『爾雅』にも記

載されていた。しかも、その注釈群は、「樸」「朴」との関連をも明らかにしている。

まず、『爾雅』〔釈木〕には「魄 榿榼」とある。この「榿榼」が上記「繫迷（挈榼）」に同じであることは以下にも記すが、まず、郭璞は、

魄大木細葉似榼（魄は大木にして細葉、榼に似る）

と、「魄」という樹木が「榼」に似ることを述べている。そして、宋・鄭樵は『爾雅注』⁴²で、この郭注を紹介した後、次のように続ける。

今江東多有之 齊人諺曰 上山斫榼榿榼先殫 按此 俗呼朴樹 其木如榼 子大如梧桐子而黃 榿榼音系醯

（今江東に多く之有り。齊人の諺に曰く「山上りて榼を斫る。榿榼先づ殫く」と。此れを按ずるに、俗に朴樹と呼ぶ。其の木、榼の如く、子の大なること梧桐子の如くして黄なり。

榿榼の音は系醯）

「榼」が江東に多く、「榿榼」に似ていること、また、その「榿榼」は俗に「朴樹」と呼ばれることが説かれている。なお、「榿榼」が「繫迷（挈榼）」に同じであることは、この「齊人の諺」の用字が入れ替わっていることから明らかである。また、「魄」についても、時代は下るが、郝懿行が『爾雅義疏』⁴³で、

即今白木也。今京西諸山有之。其木皮白、材理細密、作炭甚堅、謂之白木。白、魄声同也。

（即ち今の白木なり。今、京西の諸山に之れ有り。其の木皮は白く、材理は細密、炭を作れば甚だ堅く、之を白木と謂ふ。白、魄は声、同じなり。）

と述べている。樹皮の白い木は何種もあるが、エノキもその代表格であり、優れた薪炭材である。そして、鄭樵注に戻り繰り返して言えば、この樹を俗には「朴樹」と称するのである。

『夢溪筆談補筆』⁴⁴は、以上見てきた諸書をよくまとめた文章を残している。

梓榆、南人謂之朴、齊魯間人謂之駁馬。駁馬、即梓榆也。南人謂之朴、朴亦言駁也、但声之訛耳。《詩》“隰有六駁”是也。陸璣《毛詩疏》：“榼木、皮似系迷、又似駁馬。人云：‘斫榼不諦得系迷、系迷尚可得駁馬。’”蓋三木相似也。今梓榆皮甚似榼、以其斑駁似馬之駁者。今解《詩》用《爾雅》之說、以為“獸鋸牙、食虎豹”、恐非也。獸動物、豈常止于隰者？又与苞櫟、苞棣、樹槎非類、直是当時梓榆耳。

（梓榆、南人 之を朴と謂ふ、齊魯の間の人 之を駁馬と謂ふ。駁馬、即ち梓榆なり。南人之を朴と謂ひ、朴は亦た駁と言ふなり、但だ声の訛なるのみ。《詩》の“隰に六駁有り”是れなり。陸璣《毛詩疏》に“榼木、皮 系迷に似て、又た駁馬に似る。人云ふ‘榼を斫れば諦かならざるも系迷を得。系迷にして尚ほ駁馬を得べし’”とあり。蓋し三木相似るなり。今 梓榆は皮 甚だ榼に似る、其の斑駁なるを以て馬の駁なる者に似る。今《詩》を解するに《爾雅》の説を用い、以て“獸。鋸牙にして、虎豹を食らふ”とするは、恐らくは非なり。獸は動く物、豈に常には隰に止まる者ならんや？又た苞櫟、苞棣、樹槎とは類するに非ず、直だ是れ当時の梓榆のみ。）

ここまで登場した主な樹木名の関係を整理して図式化すると、

「梓楡」＝南人のいう「朴」＝齊魯でいう「駁(馬)」≡「糸迷」「繫迷」「挈楡」「
榑楡」＝「魄」≡「檀」≡「梓楡」

ということになる。「朴」あるいは「樸」に樹木名としての役割を与えたのは、どうやら南人や齊魯の人たちのようである。

そこで、思い起こされるのは「樸」を「白蒲」と関連付けた馬叙倫の指摘である。これは蘇地方の俗語「白蒲」が、朱駿聲によって「抱樸之轉語」と指摘されたことを受けたものであった。これに郝懿行の「白、魄声同」の説も顧慮すれば、南方における樹木名「樸」「朴」「朴」は「白」に近く、「白」が樹種特定の鍵になる可能性も生じてくる。

それでは南方における樹木名「樸」「樸」「朴」の樹種は何か。明清代の方以智も、『通雅』⁴⁵において「朴」「駁馬」と「挈楡」「榑楡」(『通雅』では「繫迷」に作る)などとの関連を考察したあと、

繫迷、一名挈楡。唐本艸「繫迷名莢蒾」、蘓恭曰「葉似木槿及楡、子如疏漉、兩兩相對而色赤、味甘。」廣志云「繫迷樹子如糯粟、可食」

(楡迷は一名挈楡。『唐本艸』に「楡迷は莢蒾と名づく」、蘓恭曰く「葉 木槿及び楡に似、子は疏漉の如し。兩兩相對して色は赤、味は甘。」と。廣志云ふ「楡迷樹は子 糯粟の如し、食らふべし」と)

と解説している。「繫迷」「莢蒾」は実は『本草綱目』にも記載された本草であり、『本草綱目通釈』〔現代研究〕によれば、ガマズミ *Vburnum dilatatum* である。日本でもよく見られる木で、赤く小さな果実が印象的である。方以智も果実に関する記述を多く引用していて、それが「可食」であるとする。「梓楡」(南方でいう「朴」)自体は「繫迷」「莢蒾」に似ているに過ぎず、同一樹種とはされていないのだが、似ているとされる木が、赤い実をまず想起させることは重要である。

次に、「莢蒾」や「檀」のように「朴」に「似ている」というではなく、その「朴」に「同じ」であるという「梓楡」が重要である。ただ、「梓楡」という樹種の正体を明かした記事は、辞書類や本草書を見ても見当たらない。例えば、清・吳其濬の『植物名実図考』および『同長編』⁴⁶には「梓楡」についての記載があるが、上に引いた資料の域を出ず、樹種の特定はできない。

しかし、一般に二字熟語の一字目は二字目が示す概念を細分化し限定する作用がある。「梓楡」の場合で言えば、「楡」を「梓」が限定すると見るのが常識的であろう。即ち、「梓」の性質を持つ、或は「梓」のような「楡」である。そして、「梓」「楡」はキササゲの類であるが、キササゲに似た大きな莢の豆を実らせる。この木はいくつかの印象的な特徴を持つが、この大きな実に注目して名づけられたのが「梓」である。「梓」は「子(み：果実)」に通ずる⁴⁷。つまり、「梓楡」とは果実が特徴的な「楡」類との意味であろうと推測される。そして、楡科(ニレ科)の樹木で果実が特徴的な樹種としては、エノキやムクノキが存在する。また、エノキ、ムクノキは樹皮が灰褐色で、材も白いので、「白木」の名に値する。

ただ、幹に「駁」と呼ばれるほどの斑紋ができるかどうかについては心許ない。ムクノキは幹が太くなると皮が剥げ落ちるが、その痕跡を「駁」と言えるかどうかは疑問である。また、この木は葉がざらつき、古来、木賊（砥草）のように器物を磨くのに使われてきたので、中国では「糙葉樹」とも呼ばれ、これが現代の標準名となっている。「駁」について、こうした明瞭な特徴に対する言及がないのも不自然ではある。「梓榆」が「駁」とも呼ばれたのは、「斑駁」があるからではなく、「駁」が「白」に通じたからに過ぎないのはいいか、陸疏「其樹皮青白駁皴」の「駁皴」は、『詩経』の他の注釈に引きずられたのではないかと、ひそかに考える。

いずれにせよ、「駁」をどう理解するかは今後の課題である。しかし、果実が甘くて食用ともなるエノキや、ムクノキなどのニレ科の樹木が「梓榆」の正体であり、蘇地方（長江下流域）においてはその木を「朴」と呼んだことは、おそらく間違いない。そして、この「朴」は、朱駿聲や馬叙倫の表記からすれば、「樸」や「樸」と表記すべきかも知れない。しかし、「樸」や「樸」と「朴」の混用された歴史は長く、峻別することに意義が見出せなくなった現実がある。ともあれ、この南方の「朴」が日本へ渡って『日本書紀』の表記に影響し、また、中国国内では現在もエノキを表すことになっているのである。

4. エノキの「厚朴」

以上を以て拙論は、その展開を終了して良いところであるが、エノキの「朴」（梓榆）を本草「厚朴」の一種とする説があるので、言及しておく。

『本草一家言』⁴⁹は「厚朴 有三種」として、その一を「自漢来者、爲真正、應于本草赤朴紫朴之名」とする。前に見た輸入品としてのカラホオに当たる。その二は「和産者、保部乃木、轉訓木音爲保部是也、此物又可用」とする。「和厚朴」即ちホオノキである。ここまでは既に記した所を逸脱しない。しかし、その三として、エノキの「朴」（梓榆）を挙げる。

近世先輩據河澗府志所述、以加條木皮爲真厚朴、即諸書所謂糙葉樹、和名女無垢乃木、愚竊謂、如加條木皮、乃河澗一府之鄉葉、而非天下通套之厚朴、（中略）不可輕易信用也、

（近世の先輩、『河澗府志』の述ぶる所に據り、「加條木」の皮を以て真の厚朴となす。即ち諸書の所謂「糙葉樹」、和名「女無垢乃木」なり。愚竊かに謂へらく、加條木皮の如きは乃ち河澗一府の郷葉にして天下通套の厚朴に非ず、（中略）輕易に信用すべからざるなり）

「近世先輩」が誰を指すかは不明にして知らないが、新井白石『東雅』に、『陸疏』『爾雅鄭注』などを引いて「朴」を「エ」と訓むべきことを説き、また、「梓榆」「駁馬」をムクノキに当てるべきを説いた一段がある。しかし、白石は、この「朴」や「梓榆」を「厚朴」の一だとまでは述べていない。また、「糙葉樹」は「葉の糙い」樹であり、ムクノキに当てるべきところを「女無垢乃木」即ちエノキに同じとしていることも分かりにくい。さらには、

冒頭で厚朴に三種ありとしながら、「河澗一府之郷薬」は信用すべきでないとするなどは一貫性に欠けると言わざるを得ない。

しかし、「近世先輩」が説くように、エノキかムクノキかを厚朴として用いた地方があっても不思議はないのかも知れない。本物の厚朴（カラホオ）が入手しにくい地方では代用品を使うことはよくあることである。カラホオが自生しない日本でホオノキを代用品としたのも同様である。エノキは樹皮の繊維を縄や紙の原料としたり、根の皮は薬用としても利用されている。『中国高等植物図鑑』には次のようにある。

皮部繊維為麻繩、造紙、人造棉的原料；果搾油作潤滑剂；根皮入薬、治腰痛、漆瘡。あまり品質の優れた薬品とは思えないが、既に見たように、厚朴と言われる商品には多くの代用品や偽物が流布している。『本草一家言』自身も、

如彼厚朴（中略）之類、則非指一物、故雖諸説各不同、而其用乃一也。（中略）樹皮樸素重厚者、皆名以厚朴、何物泥一物乎、

（彼の厚朴（中略）の類の如きは則ち一物を指すに非ず。故に諸説各不同と雖も、其の用は乃ち一なり。（中略）樹皮の樸素にして重厚なる者は皆名づくるに厚朴を以てす。何物か一物に泥まんや）

と述べている。エノキやムクノキの厚朴があっても良いのではないかとの論である。

樹皮の利用に注目するという点で類似の考え方になるが、「樹皮を利用するので、朴の名が流用されたのであろう」といった指摘もある⁵⁰。『爾雅』が「魄 榘榼」と述べていることは前に記したが、『礼記』〔内則〕に肉の調理に関して「去其皽（其の皽を去る）」という一節があり、鄭注に「皽謂皮肉之上魄莫也（皽は皮肉の上の魄莫を謂ふ也）」とある。「魄莫」は「薄膜」の義であろうから、『爾雅』の「魄（榘榼）」は「薄」に通じるのかも知れない。既に「魄」が「白」に通ずることを記したが、エノキが「厚朴（厚い木皮）」に対して「薄朴（薄い木皮）」として、その名を付された可能性も否定しきれない。ただ、ホオノキに比べ、エノキの皮は、『中国高等植物図鑑』ではわずかに根部のみが薬用となるのであり、他はその繊維が利用されるということに過ぎない。やはり長江下流域の、「白」の義を負った「朴」が現代通用の樹名になったとする考え方を修正するには至らない。

(2009/08/30)

注

- 1 大修館書店、1987年。
- 2 学習研究社、1988年。
- 3 第二版、1955年。但し、第四版(1991年)は「榎」字のみを掲げる。
- 4 三省堂、1972年。
- 5 増訂版、大修館書店、1986年。
- 6 本稿では、中国語の発音をローマ字表記する場合、声調を音節の末尾に数字で示すこととする。
- 7 小学館、1992年。
- 8 拙稿「「楸」「梓」「榎」と「きささげ」「あずさ」「えのき」(『日中言語文化』第3集、桜美林大学、2005年)。
- 9 二十卷本(元和古活字那波道圓本)。『諸本集成倭名類聚抄』(臨川書店、1968年)による。但し、引用部に関しては十卷本も大きな相違はない。行を割った細字の注は細字で表記した。以下も含めて、句読点やルビは原典を損なわない範囲で随時、寺井が付した。書下し文も特に注記しないものは寺井による。以下同じ。
- 10 『天治本新撰字鏡』(臨川書店、1979年)による。
- 11 『万葉集』からの引用は小学館「日本古典文学全集」(西本願寺本を底本とし、校訂を加えたもの)による。表記は現代通用の漢字仮名まじりに改めているが、用字法を示すため「」を付して原文の表記を示した。
- 12 森立之本(嘉永七(1854)年刊)。「近世漢方医学書集成」53(名著出版、1981年)による。〔 〕内は〈攷異〉。
- 13 唐・蘇敬等撰、尚志鈞輯校輯復本第二版、安徽科学技術出版、2004年。
- 14 明万歴18(1590)年成書。『本草綱目通釈』(陳貴廷主編、学苑出版社、1992年)による。字体は適宜、日本での通用のものに改めた。
- 15 上掲『本草綱目通釈』。
- 16 黎躍成・勞家華主編、四川科学技術出版、2002年。
- 17 「日本古典文学大系」76、岩波書店、1965年。
- 18 保育社、1980年。
- 19 「北村四郎選集Ⅱ」『本草の植物』(保育社、1985)によれば、「日本厚朴」、「商州厚朴」とも呼ばれる。
- 20 有明書房、1961年。
- 21 白井光太郎校註、有明書房、1983年。
- 22 杉本つとむ編著「小野蘭山本草綱目啓蒙—本文・研究・索引—」(早稲田大学出版部、1974年)による。
- 23 「日本古典全集」27～30(現代思潮社、1978年)による。
- 24 『説文解字注』(上海古籍出版、1981年)による。
- 25 同上。訓読は『訓読説文解字注』(東海大学出版会、1981年)による。
- 26 本文は「十三経注疏」(中華書局、1980年)による。十三経については後掲の『礼記』や『爾雅』も同じ。但し、訓読、現代語訳は明治書院「新釈漢文大系」による。
- 27 『古文字詁林』(上海教育出版社、2004年)による。
- 28 学燈社、1965年。この段の『説文』の訓読も同書による。
- 29 王念孫『廣雅疏證』(鐘宇訊点校、中華書局、1983年)積説三下“剥、脱、・・朴、・・離也”の項に「剥、朴、卜、聲近而義同」とある。
- 30 前掲拙稿「「楸」「梓」「榎」と「きささげ」「あずさ」「えのき」参照。
- 31 「剝」は「剥」字の異体と思われる。また、「木索」は「木素」の誤写と思われる。
- 32 『諸本集成倭名類聚抄』(臨川書店、1968年)による。
- 33 前掲拙稿「「楸」「梓」「榎」と「きささげ」「あずさ」「えのき」参照。
- 34 中村啓信編『日本書紀総索引 漢字語彙編』角川書店、1966年。

- 35 「新訂増補国史大系」(吉川弘文館、1952)による。書下しは「日本古典文学大系 68」による。
- 36 明・張自烈編、清・廖文英補、国際文化出版、1966年。
- 37 本稿「I. 厚朴」の「2. 本草学の厚朴」の『本草綱目』からの引用文の下線部参照。
- 38 明・王圻、王思義編。上海古籍出版、1988年。
- 39 本稿「II. 朴」の「1. 樸と朴」参照。
- 40 羅振玉校本、中国科学技術典籍通彙、河南教育出版、1993年。
- 41 四部叢刊三編所収宋刊本。
- 42 学津叢書(叢書集成新編 37)による。
- 43 『爾雅義疏』(北京市中国書店、1982)による。
- 44 沈括『夢溪筆談全釈』巴蜀書社、1995年。
- 45 「和刻本辞書辞典集成」7、通雅下(長澤規矩也 編、汲古書院、1981)及び『方以智全書』第一冊(上海古籍出版、1988)による。
- 46 「中国科学名著」第一集、二集(世界書局、1992・3年。三版)による。
- 47 前掲拙稿「「楸」「梓」「榎」と「きささげ」「あずさ」「えのき」参照。
- 48 『中国高等植物図鑑』(中国科学院植物研究所主編、科学出版社、1972年)などによる。
- 49 「古事類苑」植物部(吉川弘文館、1980)所引による。
- 50 加納喜光『植物の漢字語源辞典』東京堂出版、2008年。